

グループワーク報告書

- ・大きな被災経験が無いいため、訓練自体が机上の空論になりがち。
ただし（訓練等）行わない訳では無い。
- ・地域住民や自治会関係者でも災害が起こらないため、災害に対する危機感がない。
- ・前に雄踏中学校が学校内で宿泊訓練を行っていた。今は行われていない。
※学校内での活動はかなり制限がある。
炊き出し訓練などで火を使うことも厳しい状況。
- ・避難所である神久呂小学校を軸とした地区全体の防災訓練を計画したことがあるが、実施には至っていない。自治会や学校との綿密な打ち合わせが必要だと思われる。
- ・最近では小中学校が地域共生社会のために地域に開けた活動をするようになってきている。これらのことをきっかけに防災について小中学生も一緒に考えてみるのもよいと思う。
- ・雄踏文化センターにて、年に1回防災コンサートという取組みがある。
ホールでのコンサートを行っている際に、演奏者及び観客全員で屋外避難をする取組み
- ・地域内でのつながりが弱くなっている。干渉されたくない人が多い印象。
昔は近隣住民で葬式の手伝いなどもあった。「お互い様」の活動が無くなった。
→ つながりが減り、お互い様の活動も減ったためコミュニケーションも減った。
そのため、自然と得られていた情報も無くなった。
- ・有事の際も含めて、「誰かがやってくれる」と考えている人が多い。実際には「誰もやってくれない」から「助け合い」が必要になるが、意識が変わらない。
※やってくれない行政が悪いなどになってしまう。
- ・災害が起こったときの、日中独居の高齢者が心配。包括より訪問時に「災害の時はどうする？」と聞いたことがあるが、「自治会の人に頼む」と話していた。自治会長や組長と顔が見える関係など、近隣の人でもそのような方がいることを知っておいた方がよい。
- ・地域の行事で行われる豚汁振舞いなどを行う際に、「炊き出しの調理訓練」などと謳いボランティアを募るなど展開方法も工夫していくことが必要でないかと思われる。
- ・避難ルートの確認も実際にフィールドワークを行うことが大事だと思う。
感覚的に、津波被害を考えている人は地区内には少ない印象。地震による揺れの被害を想定していることはよく耳にする。
- ・町内で開催した防災訓練では、今年度起震車を呼んだり、防災食の提供を行ったりした。
町民同士のコミュニケーションをとることができた。
- ・日頃から災害が起こったときにどうするか、シミュレーションをしておくことも必要。そのようなことはどこかで災害が起こったり、研修で話を聞いたりすると考えるきっかけとなる。そのような場面を多く地域住民に提供することも考えられる。
- ・自主防災隊を地域で作っているが、辞めていく人がいるため小規模になってきている。新たな隊員をどのように増やすか、どのような活動をしていくか、見直しが必要。
- ・舞阪地区には避難タワー数か所ある。
- ・二弁では防災隊員や青年団、まつり関係など20名程度が集まり、毎月1回防災に関する会議をする。
- ・弁天島は島で繋がっており、孤立する地もある。
- ・カムチャツカの際には避難してきた方もおり、夏場の暑さ対策が課題となった。
- ・舞阪は津波が心配されるが、ほとんどの人は「逃げない」と回答している。
- ・サロンの際に、避難タワーや避難所までの経路を皆で歩いてみるのはどうか？
(ひなんさんぽを参考に)